

護計画にどのように生かしていくか、さらに患者の QOL を目指した継続的な看護が課題と考えている。

A-15) Technetium-99m Mercaptoacetyltri-
glycine を用いたレノシンチグラフィー
と排尿時代用膀胱シンチグラフィーに
よる代用膀胱造設術後の腎機能と代用
膀胱機能の検討

西山 勉・照沼 正博 (長岡中央総合病院
泌尿器科)

【目的】自排尿型代用膀胱造設患者の腎機能と代用膀胱機能を Technetium-99m Mercaptoacetyltri-glycine (^{99m}Tc-MAG3) を用いたレノシンチグラフィーと排尿時代用膀胱シンチグラフィーを行い、検討した。【対象ならびに方法】対象は膀胱癌で膀胱全摘除術後に代用膀胱を造設された患者10例(男8例,女2例)である。方法は ^{99m}Tc-MAG3 を用いたレノシンチグラフィーと排尿時代用膀胱シンチグラフィーにより代用膀胱造設術後の腎機能と代用膀胱機能の検討した。【結果】腎機能では18腎中16腎で正常パターンを示した。術後1カ月半の1例2腎で拡張非閉塞型を示した。排尿時代用膀胱シンチグラフィーのパターンは尿流量測定のパターンと一致していた。残尿量は排尿量と排尿前後の代用膀胱部分の RI 量から計算できた。【結語】本検査は両機能を比較的簡便に評価でき、代用膀胱造設術後患者の経過観察に有用と思われた。

A-16) 進行精巣腫瘍における自家造血幹細胞
移植併用高用量化学療法との検討

谷川 俊貴・富川 善彦 (新潟大学泌尿器科)
今井 智之・斉藤 和美 (厚生連中央総合
病院泌尿器科)
斉藤 俊弘・片桐 明善
高橋 公太 (新潟大学第一内科)
西山 勉
岸 賢治

我々は、新潟大学医学部泌尿器科において進行精巣腫瘍8例に対し自家造血幹細胞移植併用高用量化学療法を施行した。年齢は3才から42才までで、病期は初発例ではⅢB2:4例,ⅢC:2例で、再発例の再発部位は1例は後腹膜,縦隔,両肺,脳で1例は後腹膜,両肺であった。高用量化学療法は, carboplatin 1,000~1,600 mg/m², etoposide 1,000~1,600 mg/m², cyclophosphamide 1.0~1.2 g/m² を5日間に分けて投与した。造血幹細胞

移植は第8日に行い、第9日より rG-CSF を末梢白血球数が 10,000/μl 以上になるまで投与した。移植に用いた造血幹細胞は、自家骨髄のみ3例,末梢血幹細胞のみ3例,自家骨髄と末梢血幹細胞併用が2例で、移植した CFU-GM 数は 1.3~10⁵~4.7~10⁶/kg であった。

治療効果は、1例で治療関連死となったが、CR 3例, PR 3例, NC 1例であった。骨髄機能の回復は、白血球数が 1,000/μl 以上になるまで7日から12日で、血小板数が 50,000/μl 以上になるまで10日から27日を要した。

II. 一 般 演 題 B 悪性リンパ腫

B-1) 当科における悪性リンパ腫の臨床的検討

田中 彰・土持 眞 (日本歯科大学
新潟歯学部
第二口腔外科)
又賀 泉 (同 内科)
柴崎 浩一 (新潟県立がん
センター新潟
病院小児科)
浅見 恵子・内海 治郎

当科開設以来20年間(1975~1994)に日本歯科大学新潟歯学部附属病院第2口腔外科を受診した悪性リンパ腫患者は16名(一次症例,その他6名)で、全悪性腫瘍患者に占める割合は3.6%であった。一次症例10例全例が NHL で、その初発部位は節性が2例,節外性が8例,節性の全例が頸部リンパ節であった。また節外性は鼻腔・副鼻腔の上顎洞が2例,ワルダイエル輪に属する軟口蓋が2例,唾液腺が耳下腺で1例,口腔は上顎歯肉,硬口蓋,頬粘膜がそれぞれ1例であった。病理組織学的に LSG 分類で検討すると Diffuse large cell type が4例で最も多く、部位的には軟口蓋,耳下腺,上顎歯肉,上顎洞であった。また Diffuse medium-sized cell type が2例で硬口蓋,軟口蓋であった。Follicular Lymphoma は1例のみで large cell type の頬粘膜であった。

B-2) 上顎洞を原発とする悪性リンパ腫の1例

五島 秀樹・鈴木 克也 (新潟大学歯学部)
高田 真仁・野村 務 (第一口腔外科)
河野 正己・新垣 晋 (新潟大学第二内科)
若林 昌哉

今回我々は、化学療法,放射線治療に対して抵抗性の

上顎洞原発の悪性リンパ腫 (ML) の1例を経験したので報告する。症例は71歳の男性。1993年2月下旬より左側上顎小臼歯部に違和感出現し、3/31左側頬部及び上顎歯肉の腫脹を主訴に当科初診。口腔外所見では左側頬部に弾性硬の腫脹を認め、所属リンパ節には腫大は認められず。口腔内所見では左側上顎小臼歯部に弾性軟の腫脹、一部潰瘍も認められた。生検、Ga シンチ、CT の全身検索の結果、悪性リンパ腫 (diffuse type, stage III E) の診断にて CHOP 療法施行し、一次寛解した。1994年2月中旬より再度左側上顎歯肉部に再発を認めたため、CHOP, proMACE-cytaBOM, 及び放射線療法 (total 60 Gy) 施行し、一時縮小傾向を示したが、1994年12月中旬より全身状態悪化し、DHAP 療法施行するも奏効せず、1995年2月8日死亡。

B-3) 乳腺原発悪性リンパ腫の診断および治療

—当科における7症例についての報告—

中平 啓子・牧野 春彦 (県立がんセンター)
佐野 宗明 (新潟病院外科)

乳腺原発の悪性リンパ腫は稀な疾患である。診断および治療法が未確立とされるが、当科での経験を報告する。

1984年1月～95年6月の乳腺原発の悪性腫瘍総数は1,664例、悪性リンパ腫は7例 (0.4%) であった。触診および画像上では乳癌との鑑別は不可能であり、1例は穿刺細胞診、5例は生検により、残る1例は根治手術後に確定診断を得た。両胸筋温存乳房切除術が5例、定型的乳房切除術が1例、頸部リンパ節腫脹も認めた1例には生検のみ施行された。6例に術後化学療法が施行された。術後2年以内に3例が死亡 (白血化、癌性髄膜炎が各1例、骨盤腔の腫瘤形成が1例)。他病死の1例を除く3例は術後最長11年5カ月生存中である。

悪性リンパ腫は乳腺原発といえども全身疾患の1表現型と考え、外科的には腫瘤摘出術のみとし、化学療法、放射線療法等の集学的な治療をおこなう必要があると思われる。

B-4) 甲状腺原発悪性リンパ腫18例の臨床的検討

筒井 一哉・佐藤 幸示 (県立がんセンター)
新潟病院内科)
本間 慶一・根本 啓一 (同 病理)
松沢 真・長谷川 聡 (同 耳鼻科)
牧野 春彦・佐野 宗明 (同 外科)

当院で扱った悪性甲状腺腫は478例あり、その内、甲状腺原発悪性リンパ腫は18例、3.8%を占めていた。組織学的病型分類では、follicular, medium 1例, diffuse, small 3例, diffuse medium 2例, diffuse large 11例, Burkitt 1例である。性差は男性7例、女性11例で、年齢は58～89歳、平均72.9歳であった。5年累積生存率は55.3%で、1987年以前の5年生存率 (n=9) は33.3%であるのに比し、1988年移行 (n=9) は88.9%と良かった。生存率より予後に関する因子をみると、手術施行例と非施行例は全く差はなく、腫瘍が大きいもの、LDHの高いもの、症状発現から受診まで1カ月以上を要したものが予後不良であった。診断ではUS施行例7例全例、悪性と診断し、ABC施行例10例中9例はクラスV、悪性リンパ腫と診断できた。「結論」甲状腺悪性リンパ腫の予後は、いかに早く診断し、化学療法を開始するかに懸かっており、近年は、超音波と吸引細胞診で、診断可能である。

B-5) 泌尿器悪性リンパ腫症例の経験

小松原秀一・渡辺 学 (新潟がんセンター)
北村 康男・坂田安之輔 (泌尿器科)
林 直樹 (同 内科)

泌尿器腫瘍を主症状とした悪性リンパ腫の9例 (精巣6例、精巣上体および腎1例、腎1例、腎盂1例) を経験した。精巣腫瘍をきたした6例は44～77歳 (平均63.5歳) で、このうち5例は病期 I E でいずれも精巣摘除術後に化学療法を行い、4例は4～8年 NED、1例は他因死であった。病期 IV の1例は2年7月で癌死した。左精巣上体の腫脹した症例 (63歳) は CT にて左腎にも腫瘍を認めたが、精巣摘除後の化学療法により CR となり、2年経過した。腎腫瘍の1例 (40歳、女) は傍大動脈リンパ節腫大を伴う病期 IV で、腎摘除手術後の化学療法にて CR となり、5年生存中。腎盂腫瘍の1例 (40歳、男) は腸管に浸潤 (腸粘膜炎生検にて診断) しており、化学療法後に腎摘除術を行い、現在まで6年生存中である。